



SUPPORTERS CLUB NEWS

友の会 会報

TAKAYAMA-UICHI MEMORIAL MUSEUM OF ART

〒039-2501

青森県上北郡七戸町字荒熊内67-94

七戸町立鷹山宇一記念美術館内

鷹山宇一記念美術館友の会

TEL 0176-62-5858 FAX 0176-62-5860

アート・ガウディ展in七戸

実行委員会よりレポートが寄せられました

1998年6月13日(土)~7月5日(日)

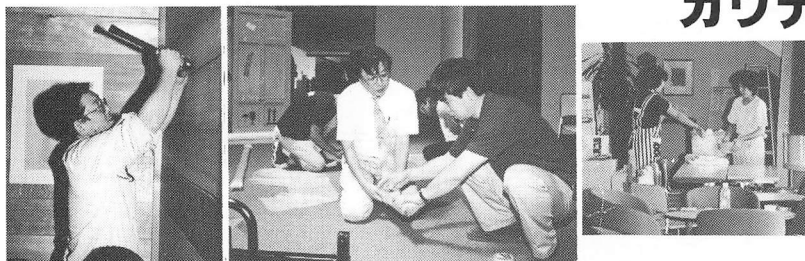
ガウディ展レポート パートI

初の実行委員会形式による
展覧会でしたが、鷹山宇一
記念美術館に併設される
スペイン民芸資料館への魂
入れともなる一大イベント
として、鷹山宇一記念美術
館・同友の会のご協力を得
て盛況のうちに展覧会を終
えることができました。

ありがとうございます。

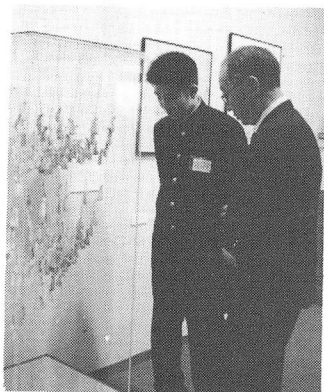
会報の紙面をお借りして、
写真とデータでガウディ展
の様子を会員の皆様にご紹
介し感謝の意を表したいと
思います。

アントニオ・ガウディ展
in七戸 実行委員会



専門家の指導の下、集まったボラン
ティアのみなさんが作品の取り付け
作業をしました。裏方では、女性軍
が昼食を用意し応援。

オープニング前の準備作業と撤収作業



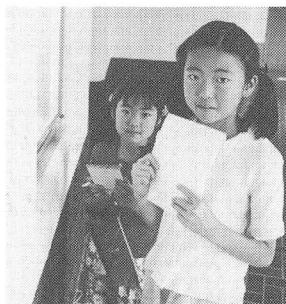
↑十和田工業高校建築科の生徒さん。ガウディの模型を囲んで学習会。



スペインの夕べ(19日)

スペイン国大使館文化担当参事官のH・ブガリョ・オットーネ氏、通訳小原京子氏、北川フラム氏をお迎えして今展に関わった方々との交流会を行いました。

さまざまなグループのお力を得て、監視ボランティアスタッフの名簿も100名を数えました。多くの目が展覧会を見守り、展覧会がより充実したものになるように心を配って下さいました。



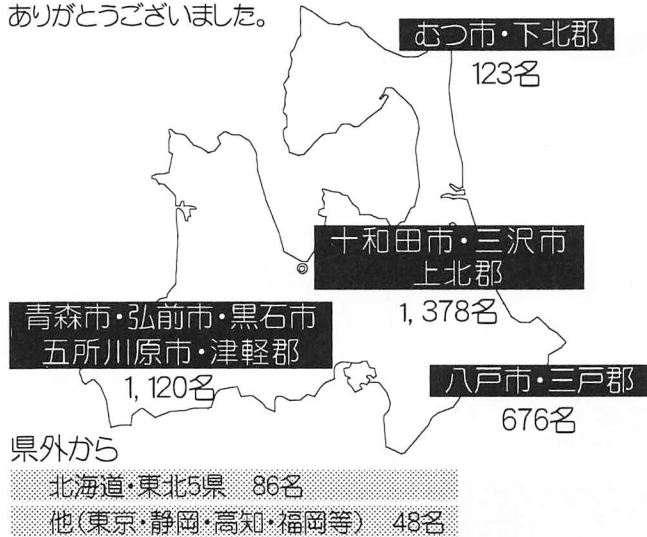
←メモ帳を手に鑑賞する姉妹

“たくさんの子供たちに見てもらいたい”これがガウディ展in七戸実行委員会の願いの一つでした。子供たちの柔らかい頭にガウディ作品はどんな風に映ったのでしょうか。



入館者データ

全入館者6969名の約半数3431名の方
からご住所をご記帳いただきました。
ありがとうございました。



このガウディ展は、全国5カ所+台湾を巡回するもので、スペイン民芸資料館を有する七戸町立鷹山宇一記念美術館は東北で唯一の会場となりました。せっかくもってくるガウディ展の情報を、近隣道県まで範囲を広げて発信することも開催を引き受けた私達の責務と考え、さまざまなメディアを通じて広報活動を行いました。結果、予想を遥かに越える6,969名の来館者がありました。インターネットの情報を見て静岡県からやってきた親子もいました。

(左資料参照)

今展をきっかけに初めて七戸町を訪れたという方も多く、会場内ではそんな来館者の方と地元の監視ボランティアスタッフとの交流の光景があちらこちらにありました。七戸町のことを語ったり、どういう訳があってスペイン館ができたのかとの質問に答えたり、地元の我々も町の魅力に再注目するきっかけを得ました。

23日間、鷹山宇一記念美術館にたくさんの笑顔を呼び寄せてくれたガウディに感謝!



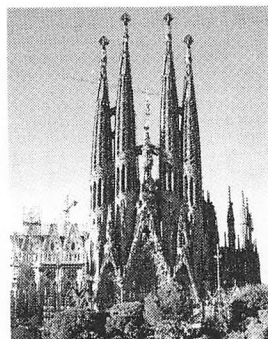
入館者第1号は
茨城県の石塚美智子さん

お知らせ

**1998年ガウディ展カタログ刊行
10月10日 頃**

出品作品と参考建築写真等 多数掲載
詳しくは美術館までお問い合わせ下さい

日数	月日	地名	時間	交通機関	スケジュール	食事
1	2000年 1/12(水)	三沢駅 発 盛岡駅 着 東京駅 発 成田空港 着	12:39 14:02 14:56 17:36 18:03 18:57 21:55	JR AF273	出発はつかり14号 やまびこ18号乗車 成田エクスプレス39号乗車 出国手続後、空路/パリへ 所要時間約3時間30分 前夜前泊 (機内泊)	夕自由 夜機内
2	1/13(木)	パリ 着 バルセロナ 発	04:25 07:40 09:20	AF1048 専用バス	乗り継ぎ バルセロナへ バルセロナ市内観光 ガウディの作品(聖家族教会、ガウディ博物館、モンジョエックの丘、グエル別邸など) (バルセロナ泊)	朝機内 昼・昼食 夜ホテル
3	1/14(金)	バルセロナ	午前 午後	専用バス	ミロ美術館とピカソ美術館見学 モンセウ半日観光 (バルセロナ泊)	朝・ホテル 昼・昼食 夜・自由
4	1/15(土)	バルセロナ	一日	専用バス	カダクセスとダリ美術館見学 (バルセロナ泊)	朝・ホテル 昼・昼食 夜・自由
5	1/16(日)	バルセロナ発 マドリード 着	08:45 09:45	IB845 専用バス	国内便でマドリードへ 着後、マドリード市内観光 (プラダ美術館、ソフィア王妃美術館、スペイン広場など) (マドリード泊)	朝・ホテル 昼・昼食 夜・昼食
6	1/17(月)	マドリード	午前 午後	専用バス	トド半日観光 自由行動 (マドリード泊)	朝・ホテル 昼・昼食 夜・自由
7	1/18(火)	マドリード発 パリ 着	18:15 20:15 23:20	AF1801 AF274	出発まで自由行動、空路帰国の途へ (機内泊)	朝・ホテル 昼・自由 夜・機内
8	1/19(水)	成田空港 着 JR上野駅 発	18:00 19:20 20:20 22:23	カライイ JR	入国手続き 特急寝台はくつる乗車(車中泊)	
9	1/20(木)	三沢駅 着	07:18		着後解散	



● 旅行代金概算
二十六万五千円(但し三沢駅発着です)ので成

● 日時
二〇〇〇年一月十二日
二十日

スペイン旅行の日程ができました。(日付は若干変更となる場合があります)

田発着の方は多少変動があります)

帰途パリで観光希望の方は、滞在費負担して下さい。

なお、旅行代金については、積立も受け付けますので、詳細につきましましては、友の会旅行係あてにお問い合わせ下さい。

鷹山宇一記念美術館開館五周年記念
スペイン美術紀行

をふまえた彫刻家として僕は一番凄い彫刻家だと思っています。この彫刻は、フィレンツェのウフィッツ美術館の一階の階段脇なんて変なところを言いますが、そこまで言いつつのはホントにシロクを感じたんですね。まさにこれは彫刻の量と言いますか、そのものスバリの彫刻に見えまして、これを見た時のシロクはホントに写真ではちよつと説明できない。これはホントにシロクでした。「ファツツイー」日本の具象彫刻家が大変影響を与えています。僕もこいつ彫刻を作

美術館日誌



【六月】

- 九日 ガウディ展作品搬入開始
- 火曜サロン開催
- 十二日 アントニオ・ガウディ展一七月初日(七月五日迄)
- 十九日 スペインのクハ開催
- スペイン大使館文化担当参事官ハラルド・プガリョ・オットーネ氏来館
- 二十八日 淡交会十和田青年部によるお茶のサービス
- 二十九日 ガウディ展入館者数五千人達成
- 【七月】
- 五日 ガウディ展最終日
- 一日の入館者数初めて過去最高を記録
- 美術講演会「彫刻のはなし」開催
- 講師は吉野毅氏(科会彫刻部会員、三〇名参加)
- 十四日 火曜サロン開催
- 十八日 第三回財団理事会開催
- 平成九年度事業報告、収支決算等審議した結果、全議案とも原案とおり承認される
- 二十一日 友の会役員会開催
- 友の会会報発行等が審議される

つた時期がありました。この不自然な何とも言えない動き。大変魅力を感じまして、僕も五、六年続けました。それで一、二点残して全部壊しましたけれども、心地良いですね、こいつう動きですね。グレン「これも日本には結構あるんじゃないですかね、日本人好みの彫刻だと思えます。グレンとファツツイーっていつのは同じ年なんです。それで大変仲が悪かつたそうです。ファツツイー「グレン」の彫刻に対して、あんなハムソーゼーション言つたそうです。そつ



■7/23、国際写真加の作品の展示に七戸の皆さんがご協力下さいました。

二十五日 第58回国際写真サロン初日

記念講演会「国際写真サロンに見る現代写真のなごれ」開催。講師は日橋義雄氏(国際写真サロン審査委員、四十五名参加)

フオルクロ「レネスタ」七戸「開催(七戸町文化村スペイン広場)

【八月】

- 一日 美術館開館記念日無料開放(入館者286名)
- 六日 七戸町文化村関係者懇親会
- 七日 グリーンファーム弦楽合奏団演奏会開催(絵画室)
- 1,2 初のミュージアムコンサートに八〇名入場
- 九日 ガウディ展反省会
- 実行委主催によりボランティアによる協力者その他関係者の懇親会を開催
- 十一日 火曜サロン開催
- 二十三日 国際写真サロン最終日
- 終了後フォトビルの協力により作品搬出作業
- 二十七日 友の会スペイン旅行打ち上げTBV日程等打ち合わせ



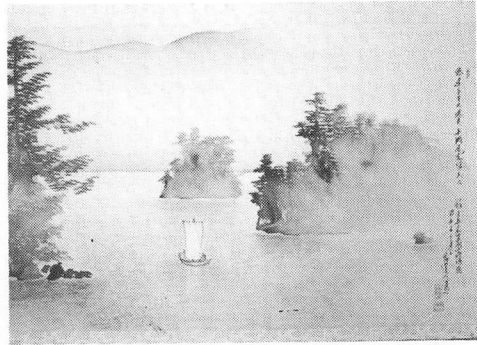
■ガウディ展反省会

今 美術館で何 やっているの？

言えはそういう感じがしますね、これはバンティーとブラジヤードハムたいに締めている所についてことだと思えますけれども。ファツツイー「ハムで言われたグレンは、あれはカカロ」だつて言つたそうです。ファツツイー「はちよつとクニヤグニヤしているからカカロ」だつていわけです。これも大変言い得てる表現なんですが……。」

(次号へ続く)

秋の気配を感じる今日この頃となりました。さて、美術館では只今常設展を開催しています。そもそも常設展とは何か、こいつ、特別展に対して使われる言葉ですが、主に美術館にある作品で展覧会を企画して、皆さんに鑑賞いただくこつとです。こつともある作品をお見せするこつとで、「なあーんだ、こつとも見れるから改めて見る必要もないや」と思われる方も結構多いのではないのでしょうか。こつとも構わないのです。当館の常設展こつとも皆さんご存知のとおり、鷹山宇一「レリクシヨシ洋ラン」、見町観音堂並びに小田子不動堂所有の南部小絵馬「スペイン陶器」、ガウディの椅子、そして、収集作家である鷹山宇一、鳥谷幡山、平野四郎、上泉華陽各氏の絵画作品となります。例えば、この絵画作品をこつとも考えてみましょう。現時点で当館の展示室を埋めるだけの作品が手元にある作家こつとも、鷹山宇一、鳥谷幡山二氏の作品のみこつとも現状のため、この二氏を中心に常設展を展開するこつともあります。展示はただただ作品の羅列をしているではありません。作品は時にその人となり、心を雄弁に物語っているからです。個人を取り上げた常設展の良いところは、作家がどのような思いで制作してきたのか、作品をおいてその作家の人としての一面が見えたりするこつともあります。ですから作品は、展示替えの都度テーマを設けて展示していきます。当館の場合、この地ゆかりの作家が実際に見たで



■十和田湖西湖の風景を描いた鳥谷幡山の掛け軸。今回常設展示されています。1942年 絹本墨画淡彩 54.5×85.5cm

あつと、感じただけであつと、野山の風景、風の匂い、透明感溢れる空気などを肌で感じながら、作品群を鑑賞出来るこつとも贅沢なおまげが付いています。こつこの時この作家はこつともなつとも、考えていたのではないだろうか……それそれこつとも思いを馳せながら作品を見てみるこつともこつこの鑑賞の仕方こつともいしょう。

では、展示替えをしたばかりのホッと今回の常設展は……こつとも鷹山宇一常設展では絵画室一に於いて「郷愁」をテーマに絵画室二に於いては油彩画の初期から現在までの流れを追う形で鷹山宇一を紹介しています。続いて、鳥谷幡山常設展を開催している絵画室三では、十和田湖をこつとも愛し描き続けた画家の十和田湖の作品を中心とした風景画と、中国の文人、風景を描いた作品を展示しています。これらと併せて、画家たちの生まれ育った七戸町を隅々まで散策してみたり、下らんがてら奥入瀬、十和田湖をまわったりするのも面白いかもしれません。また、ちよつと九月十一日から県立郷土館に於いて開催される特別展「青森県近代日本画のあゆみ展」を鑑賞してみるのはどうでしょうか。九月二十七日まで幡山の作品も展示されるこつともなつともあります。こんな風に「芸術鑑賞ツアー」を自分なりに計画するのも良いのでいしょう。秋、これからがこつとも良い季節です。こつともかくだつとも、芸術の秋、いしょうないですか。(宇野浩吉)

第58回国際写真サロンを 終えて

石田清剛

今年で鷹山宇一記念美術館では二回目となる第五十八回国際写真サロン展が七月二十五日から八月二十三日まで開催されました。

初日の七月二十五日には、審査委員の一人、日橋義雄先生をお迎えして、全日本写真連盟青森県本部主催の講演会を開催しました。

地元の七戸町の他、十和田市、野辺地町、弘前市、青森市等県内各地から全日本写真連盟会員や写真愛好者四十五名が参加しました。講演会は先生を囲んで、展示開場を移動しながら個々の作品の前で鑑賞ポイントをお話し頂くというスタイルで行いました。

また、最近普及してきたパソコンでの画像処理作品に関して、現段階では国際写真サロンでは受け入れられること等、審査会で話し合われたことから、作品審査の手順や審査風景など審査委員でなければ解らないこと等、コンテストに応募する者にとって興味深いお話を頂きました。

特に、コンテストに応募

する時の「自己採点のこつ」

①画像がシャープである事。ピンボケ、カメラブレがないこと。

②モノクロの場合はハイライトからシャドウまでグレースケールが整っていること。カラーの場合は画面の中のカラーバランスが上手く描写されていること。

③内容が良いこと、しっかりしていること。

この三点を注意して自分の作品を選んで応募すると良い結果が出やすい。

特に、①のシャープさが一次審査を通過するかどうか大きく左右し、場合によっては三分の一位がこの段階で落選する場合もあるとお話しにビックリしました。

途中、十五分のコーヒープレークを挟んでの二時間の講演会でしたが、先生も聞いている方も立ちっぱなしは疲れ、床に座り込んで聞いている姿も見られました。

今回の方式では人数が多すぎて遠くの人には作品が

良く見えない場面もあり次回から作品鑑賞ポイントの講演会はスライドを使って椅子に座ってじっくり聞けるよう、変更しなくてはと反省しております。

またせっかく著名な先生をお迎えしても、二時間の講演会だけでは惜しいので明年度は撮影会も行い、実際の撮影指導もして頂く等、中身の濃い行事にしたいと考えております。

サロン展では昨年まで見られた同じモチーフの作品同じ作者の作品が連続して入選する事が有りましたが、今年は特に気付くような作品は目立ちませんでした。

また、昨年はあまり気付きませんでした、作品の大きさに大小の差が目立ちました。これは国際写真サ

ロンでは、応募した写真そのもの（オリジナル）を展示しているからで、作品の大きさに関係なく、良い作品は選ばれる事を体験出来たと思います。

期間中、二回、三回と来館、熱心に作品を鑑賞していた方もおりました。しかし約一ヶ月の期間の開催期間でしたが、思いの外入館者が伸びませんでした。

明年以降、宣伝の方法等検討してもっともっと多くの方々に鑑賞して頂きたいと考えます。また国際写真サロンに興味を持ち、地元から応募者が入賞者が出る様になればと考えております。

（全日本写真連盟関東本部
参与・青森県写真連盟副会長・友の会理事）



講演会でご挨拶いただく日橋義雄氏

今年も美術館の内外で イベントが開催されました

7月25日 フォルクローレフェスタ' 98

スペイン広場
国際写真サロン会場

8月7日 グリーンファーム弦楽合奏団

国際写真サロン会場



研修旅行レポート第2弾

一つの静寂

「ファーレ立川を観て」 高井憲夫

この頃休日になると、今年から始めた我が自然農園に出向くことが多い。そして、その一見荒れ放題の農園の中で成長する野菜や雑草をはじめ、テントウム虫やモンシロ蝶等をみて、日常では味わえない静かな感動を覚えることがある。

神話学の泰斗、ロバート・キャンベルは神話の機能分析を通して、人間にとってそうした自然とのかかわりと芸術とのかかわりとが密接な関係を持つことを説いている。動植物や天体は常に神話の源泉であり続け、その神話は芸術と両輪となつて人間の内向的な宇宙世界を保証してきた。

そうしたことに日頃関心を抱くためか、全く久し振りの都会での体験にもかかわらず、私は今回の「ファーレ立川」の見学においてひとつの感動を得ることができた。

ウイルソンのいうように私にも八〇〇万年前、サバンナに登場した当時の人類の生物的特徴が継承され、天敵のヘビを見れば瞬間的に脅えるし、小高い丘に佇むと安堵する。そして内なるバイオフィリアが自然と共生して生きる人間としての原点の一つを教えていることに気づく。

東京はあい変わらず喧噪と過剰な装飾の渦中にあつた。あたかも沈黙し、静止することは騒がしさを邪魔する一つの犯罪でもあるかのように、全てのものが蠢いていた。その中で「ファーレ立川」は、周囲から押し寄せる音と光の暴力を拒絶し、端然と人の訪れを待っているかのようであつた。

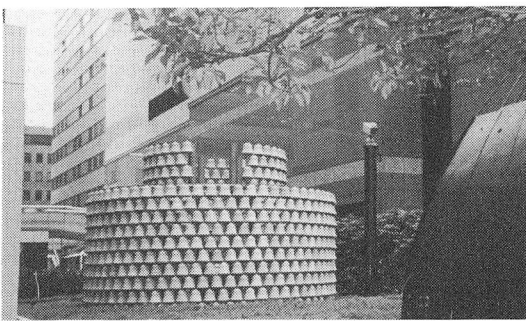
そこには確かに静けさ、私達の心を安心させ、じつくりと生存の証を確認することが出来る静寂があつた。立ち並ぶビル群は余計な化粧を落とし、芸術家が提示した個々の作品を受け入れ、静謐な調和をあたり一面に醸し出すことによつて、私達訪れる者の心に、静思し、熟考することを促すようであつた。

懐かしきロバート・ラウシェンバーグ、名も知らぬ作家達。確かに個々の作品それ自体には私の理解の及ばぬものも多々あつたが、時を経て考えてみれば、それらの作品群は「ファーレ立川」という自律し、完結した一つの空間の中で異化作用を起こすために配置されたのではなかつたかと思える。あのとき、一体なにが起きていたのだろう。私は迂闊にも黄昏の空を見上げなかつたが、見上げてみれば、電磁波のようなものが「ファーレ立川」一帯に間断なく注がれ、私達の心に静かなる感動の渦を巻き起こしているのが見えたかもしれない。そしてそれは、私達がもつとも大事にしななければならぬ内面の宇宙意識が喚起される姿であつたことに気がつくことができたかもしれないと思う。

ともあれ今回の貴重な体験をもたらしてくれた北川フラム氏の荒技に心から敬意と感謝を表したい。氏は偉業を成し遂げたと思う。そして氏と縁の深いこの美術館がますます活発な活動をくり広げ、多くの人に静やかなる感動を与える機会をふやすことを期待せずにはいられない。

なぜなら静寂こそ生きることの核心であり、静寂を増幅することこそ二十一世紀に向けた私達の最大の使命と思うからだ。深い静寂の中に心身を沈めることができた時、私達は自然と共に生し、芸術作品が語りかけることを理解できるに違いない。

七戸町商工観光課長



秋

の反の云々研修旅行

青森県近代日本画・文学の旅

■研修先■

- ①青森県立郷土館
- ②弘前市立博物館
- ③弘前市立郷土文学館
- ④斜陽館

■研修旅行特別展のご案内

- ①青森県立郷土館
- 「青森県近代日本画のあゆみ展」

- と き ■ 9月27日
- 参加費 ■ 3,000円
- 観覧料 昼食代、交通費込
- 募集人員 ■ 30名迄
- 締め切り ■ 9月2日
- 申込み ■ 美術館迄
- TEL 0176(62)5858

研修旅行の日程(予定)

8:30	9:30	10:30	11:30
七戸中央公民館出発	→青森県立郷土館	→郷土館出発	→弘前市立博物館
12:30	14:30	15:30	
昼食・弘前市立郷土文学館・フリータイム	→文学館出発	→斜陽館(金木町)	
16:00	17:00	18:00	
斜陽館出発	→青森市内	→七戸中央公民館	解散

※青森市、弘前市にて現地集合の参加者も大歓迎!!

青森県の近代日本画家たちがどのような流れに身を置き、どのような作品を描き残してきたのか? 明治から現代までの本県出身・在住の日本画家の代表的な作品を、前期と後期の二回に分けて紹介する特別展です。当館収集作家の一人でもある日本画家・鳥谷幡山の作品も展示されます。

②弘前市立博物館

「鳥谷龍岬と弟子たち」
一八七六年、弘前出身の鳥谷龍岬は、鳥谷幡山と同じく寺崎広業に師事し、幡山と同時代を生きた日本画家です。大正三年の第九回文展入選から頭角を表し、その後帝展の審査員をつとめるなど中央画壇で活躍しました。

※青森市近郊から参加の方は、県立郷土館入口に九時三十分集合、弘前市近郊から参加の方は、弘前市立博物館入口に十一時三十分集合してください。